

「ハンス・カロツサ」覚書

——作品化された医師たちをめぐって—— (二)

村 山 正 雄

一九一六年、従軍中のハンス・カロツサは「ドクトル・ビュルガーの遺稿からの詩」と銘打って、詩『逃走』(Die Flucht)を発表している。そこにおいて、多忙をきわめた医師のいわば「内的世界」と「外的世界」との相剋による焦燥と苦悩とが、たとえばつぎのように告白されている。

私は顕微鏡をのぞくことができる。／このように熱心に探究する者は／天界の美しい光を求める天文学者にもないだろう。／この磨かれた筒をとおして私は／人間の腐敗の花をさがし求めるのだ。／私の住まいは虚無の栄えるところだ、／そこには時がざわめき花咲いているのに。(S. W. I, 184)

.....

またしても私を求めるのはだれか。／私を捉えうる時間は終わらないのか。..... (S. W. I, 185)

「近代化」の一語で括られる事柄の内容はきわめて多岐にわたるのであるが、産業の機械化という事実をその象徴的な例として第一に挙げる事ができるであろう。生産過程の自動化であり、これが大量生産そして大量消費をもたらし、近代ヨーロッパの都市生活の物質的豊かさをさえる前提となったのである。産業革命後発国であったドイツにおいても、二十世紀への転換期ともなれば、普仏戦争の勝利（一八七二）、統一国家樹立（一八七二）などのヨーロッパ政治史を画する出来事と相まって、政治・経済ばかりかこの繁栄が文化の躍進としても人々に広く自覚されるにいたっている。医師ビュルガーが生きたのは、そのような時代であった。

ところで、冒頭に挙げた詩句は、むしろその「近代」のもつ陰の部分照射しているようである。産業の機械化とは、一般論として述べるならば、労働につく者の役割を細分化するのみならず固定化することであり、機械を中心とした作業部門別の専門家をつくりだすこととしてあらわれる。そのとき、解体された部分とのみかわる専門家にとって、ありうべき全体であった「もの」は、具体的な感触を欠いた抽象的な存在と化していくほかはない。「もの」のかかわりを喪失し、職務によって外部の人びとと分断された人間の孤独がここに顕在化している。

古来、医者にとって、「もの」とは一つに「病者」たちであった。その病者たちが「病氣」という名で捨象され、工場よろしく次々と診察室へと送りこまれる。こうしたなかで、病者の人間性は見失われるほかはなく、その病者自身もやがては病によって崩壊してゆく。人間として病者と向かいあおうとすれば、そのような医者の苦悩はまさに悲劇的と言いえよう。

『ドクトル・ビュルガーの最後』が「二十世紀のヴェールター」と呼ばれるに際して、この「二十世紀」の苦悩がどれほど考慮されてきたか、きわめて疑わしい。むしろ、この命名は作者のカロッサ自身が、元祖『若いヴェールターの悩み』(Die Leiden des jungen Werthers)の作者ゲーテを模範と仰ぐことによって、芸術家としての成熟を上げてきたことの発端として理解されるのが通例である。何より、文学作品の評価にあたってゲーテを暗黙にメルクマ

ールとすることは、ドイツ文学においては一つの伝統となっているのである。

内容にしたがえば、ここでいう「二人の『ヴェールター』」は共に、真摯に自己の本性に忠実に生きたいとの願望を抱きながらも、現実とのはざままで煩悶せざるをえず、やがてはみずから生命を断つ純粹な青年の心情吐露と概括できる。そして彼らの心情の表現も、ゲーテの「ヴェールター」にあつては書簡、カロッサの「ビュルガー」にあつては日記という、整然とした見とおしを欠く告白の断片においてなされる。しかもこの二人の作者が共に、執筆当時において陥っていた人生の危機を、それぞれに自己の分身たる小説の主人公を犠牲の仔羊とすることによって克服した経緯もまた二つの作品の近しさを印象づける。しかし、内容・形式・作者のこのような近似性の強調は、一方では二つの作品の相違をも明白にきわだたせている。

すなわち、「二十世紀」のビュルガーは一人の職業人・医師として暮らしをたてていた。「十八世紀」のヴェールターには、これに対し職業や労働の痕跡が相対的に希薄であり、彼はむしろモラトリウム人間の如き日々をすごし、作者自身のもつ天才の片鱗をしばしば見せる。束縛の少ないヴェールターなればこそ、ゲーテの身替わりとして死ぬことも容易であり、その死を一個人の問題として処理できたのだとの推論も、一面的ではあるものの不可能ではない。しかし、ビュルガーに対しては、医療専門家としての職業的義務・社会的責任の放棄との指弾を欠くことができない。作者カロッサが詩人として成長していったという結果からすれば、ビュルガーの結末は、カロッサの詩人あるいは人間としての自己肯定であり、逆に医者である自己の否定へとつうじているのである。

後年、小説の主人公として、なお幾人かの医者を登場させたカロッサは、その回想記『導きと伴侶』(Führung und Geleit)のなかで「医師」「芸術家」における仕事やその人間とのかかわりに触れて、以下のように述べている。

芸術の労作 (Tätigkeit) は、芸術家を孤独にし自由にする。余りにも自分に不似合な状態に入り込んでしまったと感ぜられるような場合には程なくそこから逃げ出す権利を与えるのもその労作である。だが医者はそのようではない。医者の仕事は彼を人間から距てるようなことをしない。もし人間を逃れたならば、それは彼を信頼する病気の人々に対する裏切りだといってもよからう。(S. W. I, 681)

たとえば、死を高貴なものであるととらえた、当時の知識人特有のあの世紀末を意識した陶酔的な雰囲気のみあうものではあったとしても、あるいは、病者を自己の不注意から死なせてしまったことに対する自責の念に駆られたものであったとしても、ビュルガーが自殺において生ける者・病者への義務を放棄した事実はまぎれもないのだ。「生への奉仕」とは、カロッサが終生の模範としたゲーテの関心事でもあったはずなのである。じじつ、病者をその生の全体として洞察しようと試みるビュルガーの態度もまた、このゲーテの態度へとつうじていた。自殺というビュルガーの下した性急な結論は、したがって、作者である若いカロッサに原因のあることを示している。

医師として生活を始めるにあたって、すでにカロッサは詩人として生きるべく決意し、他方において医業のほうはいわば副業とするよう思ひだめていたという。作中、ビュルガーが自由な魂へのあこがれをしばしば告白していたように、カロッサのほうも「芸術家にふさわしい自由」を多忙な業務の中にあって求め、それを得るべく企てることさえ試みている。詩人に比して医師のごとき市民的職業は低い。これがすべてであったらう。医師とは早晩捨て去るべき職業でしかなかったのである。医師の仕事をとおして垣間見ることとなった二十世紀を生きる人間の運命について、そして詩人の任務について、充分な自覚に達していくには、いずれ、転機が必要であった。そして、詩人リルケとの出会いが、この転機を触発させる。

リルケとのはじめての出会いを回想するに際して、カロッサが「医師」に対して用いる形容を拾いだしてみれば、「ビュルガー」発表当時におけるカロッサの「医師」と「詩人」の関係の一端は理解しうる。すなわち、「何かあまりまともな商売ではない」(S. W. I, 733)のどあり、しかも「最もつまらぬこと」(S. W. I, 733)そして「あまり有難くも考えていなかった」(S. W. I, 735)そのような職業であった。しかも、詩人ならば、客人として招かれた場合、「最も美しい面」へと案内される一方で、医者はずねに「その家の一番暗い傷んだところ」へ連れて行かれると、いささかユーモラスなたとえで両者を対比させている。これらの言葉は、詩人同士の語らいという念願のなかった喜びをきわだたせるためのものであれば、当事者の回想であるだけに正直な告白であろう。そして彼が医者のみならず、詩人という天職をも決して深く把握することがなかった例証としても読みとりうる。

このとき、医師ビュルガーをよく理解していたのは、むしろリルケであったのではないか。もちろん、カロッサとしても自己の処女作の不十分な点、とりわけビュルガーの自殺の動機の曖昧さに一考の余地を残してはいた。だがリルケの関心は、ビュルガーが医師として遭遇し、苦悶せざるをえなかった問題、そしてカロッサとビュルガーとが共に脱出しようとしたその職業に向けられていたのである。カロッサもこの出会いを語る際に言及しているが、リルケの『マルテの手記』(Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge)は『ドクトル・ビュルガー』に三年先立つ一九一〇年に出版されている。マルテは、そのなかで、たとえばパリの病院の様子を描写しつつ、その入院患者たちに属していた彼ら自身の固有の死にかたが、病院の医療のもとで、自動的に、レディ・メイドになりゆき、ついには奪われてゆくさまを的確に見抜いている。存在への不安のなかで真に存在するものを探求しつつ、生者、病者、死者と、マルテは憐むことなく凝視しつづけている。

このマルテを生みだした詩人リルケが、その同時代をただ単に生きるというにとどまらず、問題意識をも共有すると思われる「医師にして詩人」カロッサの『ドクトル・ビュルガー』を話題とし、さらにその作者自身の病者たちとの交流に興味を示したのは、むしろ当然と言わねばなるまい。このとき、リルケが確信して指摘する医師の仕事の明晰さ・美しさとは、外見では不分明な病氣を把握し、それを病状・病歴として語りうる医師の能力や技術に着目したものである。カロッサの話する病者の病歴に聞き入ったのち、リルケは次のように述べている。

医業というものは、やっぱりどんな仕事に較べても一番はつきりしていて美しく、恵みを授かったものなのですね。自分も若い時には医学を勉強しようと思ったものです。今からでもまだ遅くなければよいと思っています。

(S. W. I, 734)

病者・病氣を徹底して見つめること、そしてそのことによって治癒に至る道を見いだしてゆくこと、これが医者に課せられた仕事の第一であろう。病氣と治癒とを一望のもとにとらえることであり、そうして「恐怖を愛に変ずる」(S. W. I, 700) ことである。詩人リルケの本分が「最後まで考え、そして最後まで見る」(Zu-Ende-Denken und Zu-Ende-Sehen) 厳しさにあることを知るならば、その指摘は、カロッサにとっては、自己の感情に没入するあまり仕事をなおざりにし、やがて放棄するに至った医師ビュルガーのなしえなかった課題を、新ためて呈示したことになる。それは、ふたたび医者としての仕事のなかで、リルケにならって「最後まで考え、そして最後まで見る」(S. W. I, 726) ことではなければならない。

リルケとの出会いを、カロッサは戦場に向かって出発するに際しての祝福であったと述べている。この出会いの日是一九一四年春、戦争勃発以前と推定されている。因みに彼の入営は翌年秋、前線出勤はさらに一年後である。彼の記

述と事実との間のかかる時間的距たりは、むしろリルケの言葉の与えた衝撃の強さを証明するものと理解しえよう。たとえば『ルーマニア日記』のなかの何気ない感想にも彼の「見る」という課題への自覚は明らかである。

今日は、停車場の名前も、ビラも、村の名も読むまいと思う。ひとがそういうことを何だかだといひ合っていても耳を藉すまいと思う。気づかぬうちに変わって行く名もなき風景と、その風景の上にひろがる空の調子に気を付けていよう。(S. W. I, 400)

ふたたびゲーテに因んで触れば、この『ルーマニア日記』は『ヴィルヘルム・マイスター』を思い起こさせる。ヴィルヘルムは、同じ場所に三日とどまることを許されず、未来についても過去についても語ることを禁じられ、外科医としての修行をしたのであった。そうであれば、軍隊の規律にしたがい、医師の任務を遂行しつつ、異国の山野を巡る大隊附軍医においても、従軍体験は修行となるはずである。以下、ルーマニア国境地帯を旅する医師に目を転じよう。

三

おそらく、カロッサ自身には確たる意図もあるいは自覚すらもその存否が疑わしいにもかかわらず、彼の『ルーマニア日記』は、じつにみごとに第一次世界大戦の特徴のいくつかを照らし出した。そして、このことが、一九二〇年代における戦争文学の氾濫のなかからこの作品を生き延びさせ、今もなお読むにあたいする数少ない一つとさせている理由であると評価しても、あながち的はずれではあるまい。

砲爆撃による破壊、量としての価値をしか認められぬ兵士の生命、民衆の悲惨、それらに対する憤怒、悲嘆、絶望を声高に叫ぶのみであれば、いかに世界史が初めて経験した総力戦・徹底破壊戦の記録とはいえ、第二次世界大戦と核兵器の登場とを体験した今日、さして耳目をそばだたせる作品とはなりえない。この直接戦闘に従事することのない軍医の手記は、それとは異なり、一見何気なく思われる自然の風物やそこに生きる無告の民の姿を記することによって、その背後にある戦争をきわだたせるのである。

まず、書きとめられた人びとの民族的多彩さである。たとえば、戦争によって改築を中断された農家の主婦は、自家に宿営した軍医たちにマジャール語とルーマニア語を教える。夫が戦死して以来アルコール中毒症状を呈する農婦は、半ばラテン的・半ばアジア的な容貌をもっている。ルーマニア軍の侵攻を受けた村のマジャール人の女性はルーマニア兵の悪行をのしるが、同村のドイツ人女性は物静かである。またゲーテの『ヘルマンとドロテア』のヒロインを髣髴させるマジャール難民の女性は、侵入したのがロシア軍であったと聞かされて、「ロシア人は小さな百姓に何の危害も加えないし、それに女に対してはルーマニア人よりも尊敬心がある」(S. W. I, 480) で逃げる必要はなかったと話し、それらの民族の人々との接触をうかがわせる。ドイツ軍医のもとへ孫のための洗礼を求めてくるルーマニアの服装をした老人にも、敵・味方のこだわりは感じられない。つまり、作品の主たる舞台となったこのジューベンビュルゲン(トランシルヴァニア)はラテン・マジャール・スラヴ・ゲルマンの諸民族が疎密の差はあれ混住する、東ヨーロッパにしばしば見られる地域なのである。そして戦争の萌芽がこの事実根ざしていたとは、多くの歴史書の記述するところである。戦争の直接の契機となった、あのオーストリア皇太子殺害事件そのものが、すでに多民族国家・オーストリア＝ハンガリー帝国の民族政策に由来することは、ここでことあたらしく述べるまでもない。東部戦線の一翼を形成するこのルーマニア戦線の成立にしてからが、その特質を象徴する出来事なのであった。

ルーマニアの対ドイツ・オーストリア＝ハンガリー宣戦布告は大戦勃発の二年後、一九一六年八月末であり、その

三か月後、同年十二月初旬、首都ブカレストがドイツ・オーストリア同盟軍に占領され、ルーマニア国軍の指揮系統は事実上壊滅する。戦争当初において中立政策を守ったルーマニアではあったが、ロシア軍の活発な進撃に刺激され、これに乗じて年来の国民的願望を実現しようとしたのであったという。すなわち、ハンガリーの過酷な支配のもとに置かれていたジューベンビュルゲンのルーマニア人同胞を救援すべく参戦を決したというのである。敵対する二大強国に隣接した小国の選択でもあったであろう。しかし、このために急設された師団の約三分の二の装備が小銃のみとあつては、その結末は時間の問題でしかありえなかったのである。

カロツサの所属する部隊は、当初西部戦線に配置されながら、日ならずして東部の戦場へと転出させられている。この部隊は、突如参戦したルーマニア軍主力を撃退し、さらに国境山岳地帯に牽制し、そのことによつて他方面からルーマニア国内に侵入する同盟軍を援護する役割を負っていたものと推察される。しかし、そのような作戦構想は大隊軍医には無縁である。ルーマニア国軍の壊滅も、日記には記録されていない。作品に書きとめられたルーマニア兵とは、単独行動するドイツ兵を窺いつつ一日中樹上に潜む狙撃手であり、突撃発起にあたって大演説を打ち、敵であるドイツ兵たちを興がらせる指揮官などである。こうした兵士たちは単に点景として触れられているにすぎないが、ルーマニア軍の「お家の事情」を理解するとき、彼らの生にも重みが加えられよう。第一次世界大戦の経過全体からすれば、ルーマニア戦線の成立と消滅とは、いわば幕間の狂言でしかありえない。しかし、そこにかかわる個々の人間の運命にとっては、その瑣末なことこそが、重大なのである。

先に触れた戦場近くの住民たちについて、今一度考えてみよう。その人々の全ては女性か老人であった。むしろ、極めて少数の例外を除いて、作品にあらわれる非戦闘員は、老人と女と子供なのであり、しかも夫や父・息子を戦場で失なっている人々も少なくない。あるものは難民として居住地を追われ、あるものは家屋を戦火に焼かれ、また外国軍隊に占拠される。そして、家財を掠奪され、空腹に悩み、また生命をも失なう。

常時の移動をこととする野戦部隊に属しながらこれらの人びとを心に留めたという点に医師ビュルガーのもつていた同情心を重ねて理解することも可能であろう。ただし、これらの人びとがその土地に点景となつてとどまり、軍医の視界から去つてゆくところに、相違はある。そして、この人びとの生きる場は大都市ではなく、せいぜいが小都市にすぎず、多くは農山村などの小邑であつた。拾ひあげて列挙すれば、おそらくは悲惨さの総和となつて、いわば民衆の泣訴の声をあげるためのデータともなりえたであろう。この人びとの不幸の背後には、たしかに戦争がある。しかし、軍医の日記の記述は、一つ一つの苦痛がたとえば「戦争の悲惨さ」などの言葉によつて抽象化されることを拒んでいる。

例をあげてみよう。彼の部隊の兵士たちは国境地帯の山中を行軍中、焼け落ちた民家のかたわらに奇矯なふるまいをする老婆を見かける。同情した一人の将校が話しかけるが、とりつくしまもないまま、逆に追い払われる。多くの兵士たちは「差しでがましい同情なんぞ役に立たぬ悲劇があつたのだらうということを察して」(S. W. I, 427)とおり過ぎてゆく。しかし後刻、野営する兵士たちの話題に、この老婆の身の上が憶測をまじえて供されることになる。そのうわさ話が打ち切られたとき、大隊軍医は次のように考える。

話が平凡なことに戻つた時には私はうれしいといつてもいい気持ちになれた。あの出来事にどういう意味があるうか。うえも寒さももはやない世界へ人間を連れていってしまうような苦痛、心をこめてなだめ浄める慰めや好意をさえ斥けずにはいられないような苦痛、この人間の最後の偉大な聖物は、どの最高の守護神ともつながつていて、それをおしゃべりの話題にすべきではあるまい。そういうものを、残虐を好む話し手や、人間の魂の探究家の関心事としていいのか。……(S. W. I, 428)

戦争が如何なるものかとの問いは、この老婆には無縁であるに相違ない。まず苦痛が存在し、その苦痛に耐えることのみが、この場合には彼女の生そのものなのである。他国人には奇矯に映じるとしても、彼女の振舞いは自身の属する固有の文化圏内の人びとには、その意味がそしてその苦痛の深さが十分に伝達されえたはずである。

軍医にとってより身近な例によると、はじめて作品に出現する負傷したロシア兵捕虜は「大声で泣きながら互に傷を見せ会」い、「痛みを遠慮なくがなり立て」(S. W. I, 473)ている。そのかたわらで、ドイツの負傷兵は、齒を喰いしばって痛みをこらえている。しかし、類似の状況下でのルーマニア兵にはこのような観察はない。それ故に敵兵が一般に軟弱であるか否かが問題となっているのではない。じじつ、別のロシア兵捕虜の場合、ドイツ軍将校たちの訊問をのりくらりとかわしつつ、ついには黙秘して、その大胆さが称讃されていたからである。

苦痛に処するためにそれなりの流儀のあることは、あらためて述べるまでもあるまい。このような流儀とは、それがたとえ魔術・まじないであるにせよ、聖者の苦行譚を反復追想するにすぎないにせよ、その流儀によって苦痛に耐え、死を迎える男あるいは女の固有の世界の表現にほかならない。それはまた、民族や文化・伝統によって異なった形式をもつ独自の固有の生の多様さ、多彩さを証明するものでもある。このような表現は、そのそれぞれの民族・文化・伝統の枠内において、生の高貴・連続性・完結性をそこで見守っている人びとに保証してみせる。そこでは、戦争といえども他の事象とならんで、苦痛をもたらしものとしては等価なのである。

大隊軍医はジーベンブルゲンの土地に根ざして生きる異民族の人びとに、以下のような感想を書きとめている。

……健康そうな肥った顔は、種族の精神を美しく現わしていて、甲乙がない。ふとイタリアを連想させられるが、ここにはイタリア人とはややちがったものがある。何か動物的に柔軟なもの、それに更に何か内に籠った、内側に向かってきき耳を立てているようなもの、野育ちの、ごく古い貴族性のようなものがある。……

部隊が通過して行っても、ほかの土地の人たちのように、口をぽかんとあけて見とれているようなことがない。人間が非情で、自分自身のことですぐ一杯で、人間の運命が急速に明確に決定されて行く地方がこのあたりから始まるということがはっきりと感じとられる。(S. W. I, 466)

古代あるいはイタリアへのカロッサの関心が読みとられる一節である。軍医はこの異郷の人びとが、自然と一つの生を営んでいた古代以来の連続性を維持して生きているのだと感じている。生命の源である自然の掟にしたがって生きる能力こそが、この人びとにおいては、苦痛や苦難に立ち向かう態度・流儀の裏付けとなるのである。

この苦痛と生の態度は、この作品のなかでもひととき知られた、仔猫の難死の物語によって具体的に、精密に叙述されている。すなわち、人間の気まぐれによって、一群の仔猫たちがいとも無造作に殺害される。その中からただ一匹が起き上がり、数日後、苦痛の中に死にゆく様子を、大隊軍医は凝視しつづける。

……仔猫はその苦しみによって神に近いものになったかのように、みな畏怖に近い気持ちを仔猫に対して持っていた。……また事実、この小さな猫の様子には何か驚嘆すべきもの、仔猫をしてその悲惨な状態を超越させるほとんど筆舌に尽しがたい何物かがあった。なるほど死が次第に剥ぎ取ったり踏みにじったりすることはできようが、しかし決して抹殺はしえまいと思われる生得の荒削な優雅の意識が、一種の誇りがあった。その苦しみを無視しつつ、自己の本性に忠実であろうと努力し、既に滅亡の息吹を浴びながらもその品位を保って、小粋に首を曲げることをやめようとはせぬその容子、これこそ見守る人々を、苦痛そのものよりもたしかに強く撃ったのだ。ここには何か精神的なものが隠されている。そして古代エジプト人が、この動物を神聖なものとして見、これを殺す者を罰したのもいわれのないことではなかった。(S. W. I, 461-462)

苦痛のきわみにおいて示される生の様式の高貴。それは周囲で苦痛を見守る人びとにも、生の本質、神聖性を自覚させずにはおかない。仔猫たちを直接に殺害したハンガリー人の少年が感動する姿を見やりつつ、軍医は「すべての啓示、すべての、人を変革する恐怖を散おうではないか。」(S. W. I, 464)と述べ、この物語の記述を終える。

ひとつひとつの苦痛・苦難あるいは死を凝視しつづけると、それらは生の多彩さ・多様さとなってあらわれ、生への洞察を与える。したがって、苦痛・苦難を一般化・抽象化することは固有の生のもつ意味を奪うことへとつうじゆく。死と生とのこのディレンマは、あの自殺した医師ビュルガーの陥っていたものであった。しかし、この青年医師の再生・再来ともいうべき大隊軍医は、一人の下級兵士の言葉「愚劣な榴弾の破裂のために忽ち木葉微塵にけしとんでしまうものが何で精神的統一体だろうか」(S. W. I, 395)を自己自身への問いとして引き受け、この死と破壊に象徴される戦野を巡り歩くことによって、逆に固有の生の意義を見いだしたのであった。

四

十九世紀中葉以来において医師の果たしてきた役割にふさわしく、軍医なるものの存在もしばしば誤解のもとにある。戦場における医療行為という事実から、ただちにフロレンス・ナイチンゲール(一八二〇—一九一〇)やアンリ・デュナン(一八二八—一九一〇)といった人びとの名、また国際赤十字の精神が連想されるに相違ない。そこでは、医学や医療はイデオロギーや政治の対立、敵味方を超越したヒューマニズムに裏打ちされた科学・技術なのだという、西欧の近代社会に特有の樂觀主義が看取されよう。普遍的な人間性への理想、人類の進歩に対する熱い想いもあるに相違ない。カロッサのこの作品からも、敵・味方の別なく、時には友軍の兵士からの不満すら聞こえるほどに、

献身的に治療にあたる医師の姿が浮かびあがる。

しかし、日記において記録されるこの軍医の勤務内容は、さしあたり次のようなものである。

師団からわれわれの戦闘力についての報告が求められている。もう一度防毒面の点検をやらなければならない。明日は大隊検閲だ。大きな活動をする力が充分にないと思われる兵は、全部選り除けなければならない。それらの兵は補充大隊へ転属になる。出撃方向は全く不明。残余の兵にはコレラの予防注射をするからには東部戦線か。

(S. W. I, 394)

説明に多言は要すまい。「戦闘能力の維持・管理」であり、じつはこれこそが軍医の主たる任務なのである。とりわけ、この軍医の属する歩兵部隊にあっては、個々の兵士の肉体的強健度そのものが、軍としての精強度を測るバロメーターの一つなのである。むしろ、軍医が部隊の戦闘力の鍵を握るとして過言ではない。そのみか、引用文にみられる兵士の選別が、兵士各人にとっては生死にかかわる決定を意味することは明らかであろう。近代医学がもつ奇妙な権威は、この近代の軍隊においてはさらに象徴的なまでに高められる。そして、その事実も次の例にも顕著である。

前線への途上、兵士一般の健康状態を質された軍医は曖昧な返答をして、かえって健康調査を命じられる。前線に向かうという状況下においてのこのような調査が如何なる事態をひき起こしうるか、軍医は十分に認識している。はたして、執拗に行われる問診に、軍用列車はパニックの状態を呈する。

……面喰ってぼんやりと笑っている者もいたが、大部分の者はまた何かわなにでもかけられるのじゃあるまいかと邪推してひどくあわてていた。しかし大真面目な質問だということがわかると、たちまちあすこがいたい、こ

こがいたむと、いたみを感じだす者がでてきた。いや、五分前までは鬼をもとりひしぐほどに頑丈だった筈の若い兵士の中にさえ、どうも自分は病院入りの資格があるらしいと思いだすような者がでてくる始末であった。今日は十二人の病氣申し出で打ちきりにしてしまったが、四十人五十人の病人をこしらえるのは造作なかっただろう。(S. W. I, 405-406)

いささかユーモラスに、軍医という制度のパラドクスが語られている。近代の医学・医療が伝統的な生を営む人びとから、みずから病苦に立ち向かう力を減少させたように、軍隊における軍医の介入は、兵士の士気・ひいては軍そのものの崩壊をも導きかねないのである。この崩壊をかううじてささえることも、また軍医に負わざるをえない。補充されてきた新参のある兵士が病氣を申し出ようとするが、古参兵たちに罵倒され、そして妨害される。共通の地獄から脱け出ようとする者へのねたみであろうか。それと察知する衛生下士官の機転によって、その病兵は衣服を剥ぎとられ、雪原のなかに寝かせられる。

……………そうなったからには、寒さにふるえている男を病院でやるのと同様に馬鹿丁寧に打診し、聴診し、体温計を口中にさしこませる以外に私のとるべき途はない。周囲はしんとしてきた。臨床的儀式に呪縛されて、悪口雑言はびたりとやんだ。そこにねかされている弱々しい男を見て、ほかの兵隊たちは自分たちがまだどんなに頑健でしゃんとしているかを次第に感じ始めた。(S. W. I, 487)

長く軍隊は兵士各個の肉体のみならず、その精神力にも依存してきた。その精神力とは、愛国心や敵愾心といういわばイデオロギーに類するものよりも、むしろ、古代ギリシア・ローマの時代以来、戦士のモラルとして称揚されて

きた、苦痛や不安・恐怖に耐え、そして立ち向かう力なのであった。さらに、自己の感情を克服して、みずから一個の戦う物体と化してゆく精神態度ということになる。このようないわゆる戦士気質を生来身にそなえた者や職業軍人はともかく、日常の生活の場から切り離されて集められた兵士にとっては、訓練や節制・規律によって、ようやく得られる精神態度なのである。そして、一般兵役制度の最後尾に列する国民兵 (Landsturm) といえども、一人の軍人としてこの大隊軍医は自軍の崩壊を願うわけではない。彼は、たとえば齢五十に達して持病に悩みつつも、なお野戦部隊を指揮し、自他に厳格で口やかましい老大隊長や、あるいは掌握する中隊の紀律の弛緩を自己の全存在を賭して矯正すべく試みる将校に見習うことによって、その精神態度をわがものにしようとする。そして、そこにおいて医師としても自己変化をとげていることに、彼は気がつく。

ある日、宿営した民家の主婦に請われるままに、その娘を診察する。この作品に唯一とどめられた結核病者である。

診察している間、長い戦場生活がどれほど人間の内部の形態を変えるのであるかが、改めてまたはっきりと知られるのであった。幾年もの間、日々の仕事であったところの、諸器官を探って病竇を突きとめることが今ではもうそう易々とは運ぼうとしないのだ。それどころか、こんなことは、よき死をもよき生をもたらさぬ、まことに頼りない魔法のように、粗雑な危なっかしい行為のように思われてきた。多くの医師は患者にたいして将来は必ずや今までは別の態度で臨むことであろう。他人のからだの深い翳を貫き明らかにしようとする者は自身若干の訓練や節制に服さねばならず、わずかな人たちを一層確実に治療するためには恐らくは他面多くの者を断らねばならないだろう。今の場合私がやったことはお芝居にすぎなかった。診察が終って、衛生車から薬を持ってくるからと身ぶりで知らせると、母と娘はその場はそれで満足し慰められた。(S. W. I, 424)

医者は、この瀕死の病者にたいしては治療行為ではなく、「お芝居」による慰め以外の何をもしえぬことを感知する。しかし、それは否定的意味においてはではない。言語を異にするというこのことによって、同情などの感情にたいて、医者は内心の自由を保ち、病者を生命の出来事としてとらえる。かつては憎悪していた微生物・病原菌をもこのとき、自然のうちにある生命の出来事であると認める。つまるところ、病者自身が苦痛や死に立ち向かうほかはないのであり、その病者の「よき死」「よき生」への助力こそが、医者の任務であると了解されたのであった。

医者の仕事は生と死とを凝視することであり、それは自然のリズムを洞察することでもあろう。そこで、病者という自然そのものにそくして即物的にふるまうことが求められる。この大隊軍医は、やがて同僚である連隊軍医の仕事に刮目する。

……私はこれまでに、これほどの軽快と着実と積極性とを以て困難な務めが果たされるのをかつて見たことがなかったからだ。彼はあせらず、騒がず、出血する動脈を結紮するにしても碎かれた手足に副木をつけるにしても、まるで万事が向うから彼の両手に順応してくるような有様であった。われわれの努力の目標たる心のこもった冷静な行動、それがこの戦場の大騒ぎの只中で静かに狂いなく行われていた。(S. W. I, 446)

軍医が印象的に描きだすこの光景は、医術にかかわる用語さえ除けば、むしろ、たとえば指物師や陶工の工房を髣髴させる。手仕事をつうじて職人たちは素材と一つとなり、やがて無形のものから有形のものをつくりだし、さらに作品に生命をも与える。この手仕事にも似て、この医者の技術は、あたかも負傷者みずからがその固有の生の法則にしたがって治癒・回生への方途を探るかと思わせる。よき死・よき生をもたらすこととは、この固有の生の必要に則して応じてゆくことなのである。医術の極致がここにある。大隊軍医はそれを見いだしたのである。

『ルーマニア日記』のなかでもよく知られたフィナーレ、すなわち戦死した兵士の遺稿の朗読は、この医術の極致を見いだした大隊軍医の死と破壊とに対する回答である。カロッサの前作『ドクトル・ビュルガーの最期』のあとには、本稿の冒頭に引用した遺稿詩『逃走』が、医業や病者たちから逃亡するという願望を告白していた。この事実を想起するのみでも、医師ビュルガーと大隊軍医との落差はおのずと知られる。

その戦死した兵士は、故郷という自己の固有の生の連続性をささえる土地から隔てられた異郷に死ぬ無念を訴え、生きて帰郷する戦友にはつねに死者たちの声に耳をかたむけ、その再生を待つよう呼びかける。この死者の声を大隊軍医は復元し、おのれのものとなしつつ、それに生命を与え、全体を一つの完成した詩として朗読する。いささか感傷的な表現で補なえば、この死者の声は、生きて七十年後の今日の世界に達しえたというべきであろうか。

兵士の遺稿を拾いあつめ、判読するのは、「よき死」「よき生」をもたらす医者たるもののなしうるわざであった。それは同時に、詩人たるものの仕事であることも明白であろう。いずれにせよ大隊軍医の修業の遍歴はこのような経過をたどり、「生への奉仕」へと新たに導かれたのである。

「ヘビの口より光を奪え」——これがこの小説のモットーであった。その意味するところは、戦争による死と破壊とのただなかにおける明かるい人間性への確信であると、しばしば語られてきている。だが、その死と破壊とを人間にもたらすという点においては、近代の医学・医療もまたその責めを負うべきであることは、すでに考察したとおりである。余談ながら、その責めに関して、近現代における生物・化学兵器の研究開発にかかわる医学者・医師の役割は忘れるべきではあるまい。大隊軍医や医師ビュルガーの苦心の由来もまた、このヤヌスの神さながら二つの顔を見せる近代医学の問題性に発していたわけである。

同様に旧約聖書の創世記における墮罪物語このかた、ヘビは人間の誘惑者であり、そしてまた人間の本能や欲望・

衝動にかかわるもののシンボルでありつづけた。すなわち、ヘビは、時代や土地の別をこえてひろく屋敷神として愛され、豊かな生産を期待されたものである。そして、われわれの関心にそくしては、医療・医学のシンボルでもある。それゆえ、大隊軍医の制服の襟には「アスクレピオスのヘビ」が徽章として縫いつけられていたはずである。性急な解釈はさしひかえるべきであろう。しかし、私感を述べることを許されるならば、ヘビにまつわるさまざまなイメージには、「近代」が姿をかえて見え隠れするように思われる。他日、あらためて考察したい。

—未完—

テキストおよび参考文献

- Carossa, Hans: *Sämtliche Werke* (S. W.) Bd. I, II, Insel Verlag, Frankfurt a. M., 1962.
: *Briefe* Bd. I, II, III, Insel Vnsel Verlag, 1978-1981.
- Langen, August: *Hans Carossa. Weltbild und Stil*, —2. Aufl.—, E. Schmidt, Berlin, 1979.
- Vogt, Willi: *Hans Carossa in unserer Zeit*, Rotapfel-Verlag, Zürich, 1978.
- Martini, Fritz: *Das Wagnis der Sprache*, Ernst Klett Verlag, Stuttgart, 1954.
- Haueis, Albert: *Hans Carossa. Persönlichkeit und Werk*, Hermann Böhlaus Nachfolger, 1935.
- Braun, Felix: *Rumänisches Tagebuch*. In: *Über Hoans Carossa*, hrsg. von Volker Michels, Suhrkamp Verlag, 1979.
- Faesi, Robert: *Hans Carossa als Arzt und Dichter*. In: *Über Hans Carossa*.
- Hohoff, Curt: *Arzt und Dichter*. In: *Über Hans Carossa*.
- Krell, Max: *Raube das Licht aus dem Rachen der Schlange*. In: *Über Hans Carossa*.
- Ruprecht, Erich: *Hans Carossas heilkundige Dichtung*. In: *Über Hans Carossa*.
- Müller-Seidel, Walter: *Autobiographie als Dichtung bei Hans Carossa*. In: *Über Hans Carossa*.
- Pongs, Hermann: *Krieg als Volksschicksal im deutschen Schrifttum*. In: *Dichtung und Volkstum*, Bd. 35, 1934.
- : *Hans Carossa*. In: *Deutsche Literatur im 20. Jahrhundert*. Struktur und Gestalten. 5. Aufl., hrsg. von Otto Mann und Wolfgang Rothe, Bd II: *Gestalten*, Bern und München, 1967.

Falkenstein, Henning: Hans Carossa, Colloquium Verlag, Berlin, 1983.

Rohner, Ludwig: Die Sprachkunst Hans Carossas. Der Stil als Spiegel des Weltbildes, Max Hueber Verlag, München, 1955.

Illich, Ivan: Limits to Medicine. Medical Nemesis.; The Expropriation of Health, Calder & Boyers Ltd., London, 1976.

(金子嗣郎訳『脱病院化社会』晶文社一九七九年)

Ariès, Philippe: Essais sur L'histoire de la mort en Occident du moyen âge à nos jours, Éditions du Seuil, Paris, 1975.

(伊藤晃・成瀬駒男訳『死と歴史』みすず書房一九八三年)

村上陽一郎(編)『医学思想と人間』朝倉書店 一九七九年

二宮宏之・横山紘一・福井憲彦(編)『医と病い』新評論 一九八四年

Hart, Liddell: History of the first world war, Cassel & Co. Ltd., 1970.

(上村達雄訳『第一次世界大戦』フジ出版社 一九七六年)

付記 テキストの引用にあたって、第一章においては大畑末吉氏、その他においては高橋義孝氏の訳文を使用させていただいた。